古代日本の鉄器文化の源流に関する一考察

進藤義彦

(1) まえがき

中国における鉄器使用の始めは春秋時代中期すなわちBC六、七世紀頃というのが従来の通説のようである。中国の鉄器文化は、高度の青銅鋳造技術のあとを承けて先ず鋳鉄に始まり、特に農具として広く使われたが、鍛鉄が使われだしたのは大分おくれて、ほぼBC三、四世紀頃と推察されている（関野雄『中国考古学研究』昭和三十一年刊）。

華北に発達した鉄器文化は東北地区を経て朝鮮半島に伝わり、次いでそれが日本列島に影響を及ぼしたと見られており、それは弥生時代初期でBC二―一世紀頃とされていた。

日本の鉄器文化は弥生時代、言い換えると稲作文化と深く結び付くものとされ、縄文時代には鉄器は存在しなかったとするのが従来の通説である。

(2) 通説に対するいくつかの疑問

日本の鉄器文化に関するこのような従来の通説に対しては、これまでも一部の史家の中には疑問を抱く人が無くはなかったが、戦後はとくに、考古学的実証の無い見解は余り顧みられなかったようである。これら一部の史家の見解のいくつかを、筆者の私見をも加えて次に述べる。

一　斎藤昌二氏の畢生の著『日本古代史攷』によれば、日本の鉄は縄文中期まで溯るとある。氏の見解は卓抜で、特に縄文中期文化の特色たる大型石棒と石皿をそれぞれ鍛造用の鉄鎚（かなづち）と鉄敷（かなしき）と見ているのは異色の見解であると思う。因みにこの石棒・石皿と同時に鉄鉱滓が伴出しており（山形県湯殿山）、また氏は、高純度の鉄鉱石を赤熱してこれを堅石で鍛錬して、容易にその夾雑物を機械的に叩き出して鍛鋼が得られることを度々実験したと述べられている（『日本古代史攷』昭和二十八年刊、中巻四六―五二、一七〇―一七一頁及び上巻口絵第一図、中巻口絵第一図参照）。

なお氏は、中国大陸から鉄が伝来する以前に俘囚臣（ふしゅうのおみ）によって古い製鉄法が伝えられており、その伝統を継ぐものが月山の刀鍛冶で、その鍛錬法には備前刀と異なった独自の手法のうかがえることを記しておられるが、この見解は次の白柳秀湖氏のそれと同じである。

二　白柳秀湖氏は、日本の民俗文化はツングース文化に関連ありとし、鉄器文化も韓鍛冶（からかぬも）に先だって沿海地方からの俘囚臣によって北陸奥羽地方に発生したと見ている（白柳秀湖『新版民族日本歴史』建国編、昭和十七年刊、一三二―一三

八頁)。これは、「BC一千年頃に南沿海地方では既に鉄が使われていた」と言うソ連邦『シベリヤ史』の記述(後出)と考え併せて興味ある見解である。

三　日本古文献の再確認

記紀その他の伝承の中には、太古すでにわが民族が鉄を作った事実を立証する幾つかの記述が見られるが、筆者はこの伝承を歴史的、考古学的研究を更に深く促進するための貴重な文献として高く評価する。この件については既に多くの識者によって研究し尽くされていると思うが、再確認の意味でここにその伝承のいくつかを拾ってみよう(傍点筆者)。

天照大神の岩戸隠れについて『古事記』は、

「天安河の河上の天堅石を取り、天金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度売命に科せて鏡を作らしめ……」

また『日本書紀』は、

「……石凝姥を以て冶工と為し、天香山の金を採りて、日矛に作らしむ。又真名鹿の皮を全剝にはぎて、天羽鞴に作る」

さらに『古語拾遺』は、

「……天目一箇神をして、雑の刀・斧及鉄鐸を作らしめ……又天鈿女命をして……手には鐸著けたる矛を持たしめ……」

と伝えている。

書紀巻三の神武天皇皇妃の媛蹈鞴五十鈴媛命はその名の示すように鍛冶部の出ではあるまいか。また同書巻四綏靖天皇の章に、

「倭鍛部天津真浦をして真麤鏃を造り、矢部をして箭を作がしむ」

とある。

右のほか、記紀の中には、石剣や青銅剣とは思えない鋭利な剣の話がしばしば出てくるが、これも見逃してはならない。

以上のように、鉄、鍛冶、鞴などの語が使われているが、これらの伝承はすべて、韓鍛冶渡来以前の日本本来の倭鍛冶に関するものと考えられる。

四　俘囚臣川上首による作刀

韓鍛冶の祖と言われる卓素が王仁と共にわが朝に迎えられたのは応神天皇十六年（二一六）と考えられるが、これより遙か以前、垂仁天皇三十九年（AD一〇）に、皇子五十瓊敷命が鍛工俘囚臣川上に命じて太刀千振を鍛造させて石上神宮に蔵められたことが『日本書紀』に見える。石上神宮の宝物帳に記載されているという「常陸国俘囚臣川上首厳美彦」「陸奥国俘囚臣河上首嘉久留、河上首達久留」あるいは現存する在銘の宝剣「登嘉良久留、広虫、麁鹿火、畝田努、新蓐太久利、安久利」などの刀工は、斎藤氏の見解によれば、「蝦夷人の刀剣鍛造技術者を召し抱えて首に任じ、川上に集めて皇子に直接指揮させて川上部として石上神宮に奉仕させたもので、彼らは刀工として相当の優遇

を受けたであろう」とのことであるが筆者も同感である（『日本古代史攷』中巻一七七―一七八頁）。けだし古典に言うところの「俘囚」とは、蝦夷の皇恩に服して帰順したものの称である（平凡社『大辞典』その他）。

これら俘囚臣の鍛工は、蝦夷地の開発に伴って、大和民族本来の鍛工と合流し、後世韓鍛冶渡来後これと対立して倭鍛冶として技を競った刀工の祖と見られるのであって、中国の製鉄技術伝来より遙か以前にわが国に製鉄技術のあったことが考えられる。

五　日本刀の鍛錬技術

世界冶金学上の驚異とされている日本刀の古い鍛造技術がすべて中国大陸乃至は朝鮮半島から伝来の韓鍛冶に由来するものであるとの見解にも、前項と相俟って疑問がある。古刀期と同様の鍛錬・焼入の技術は既に奈良時代（八世紀）に行なわれており、日本の刀剣は技術的には同時代にほぼ完成の域に達していたと見られている（『日本刀全集』第一巻二六頁）。そうして、十一世紀頃からは刀剣が中国に輸出されるようになり、後世の室町時代における輸出数は、記録に明らかなだけでも、年々、万振り単位の厖大な数に上った（前掲書三八―三九頁）。

歴史時代になってこのような優れた鍛刀技術が伝来したとすれば、大陸や朝鮮のどこかにも優れた古代の刀剣やその製造址、文献などが遺されていてもよい筈なのに、そういう事実を聞かないのはどういう訳であろうか。

わが国の古代の製鉄は、豊富な砂鉄を原料とし、これを豊富な森林資源の薪や木炭による低温火力で熔かしたあと、鍛錬という機械的作業で夾雑物を叩き出して少量良質の鋼を得たのに対し、中国の製鉄は先ず高温を以てする鋳造から出発したことに比べると、わが国の鉄は中国の鉄の歴史とは異なった独持の発展形態を持つかに思われる。卓素が

伝えた、恐らくは鋳造技術（或いは鋳鉄から鍛鉄を作る技術をも含めて）が、倭鍛冶の鍛造一本の技術に大きく影響したであろうこと、さらには質よりも量産を誇る鋳造の方が目的と時代によっては大いに歓迎されたであろうことは否めないが、韓鍛冶と対立し融合して行った本来の倭鍛冶がいたことを忘れてはならない。

六　日本の気象条件と鉄器の保存

日本は高温多湿で、農林資源に恵まれている反面、鉄の保存には適しないので、包丁や鎌などを屋外に放置しておけば一、二年で原形は無くなってしまうだろう。これまでの考古学遺跡発掘の実績では、よほど保存のよいものでもせいぜいBC二、三世紀以前に溯ることはできないようである。

BC一千年頃の鉄器が現われたと言うウラジオストク付近は、大陸の内陸や砂漠地帯に比べると比較的多湿地域に属するが、それでもその気象条件を日本のそれに比べると遙かに鉄の保存に適していることが判る。彼の地でそれほど古い鉄器が良く保存されていたのは、鍛鉄に比べて錆び難い鋳鉄であることにもよるであろうが、気象条件に負うと

		日本（本州各地平均）	ウラジオストク
温気	八月平均	摂氏二五・六度	摂氏二〇・三度
	年平均	摂氏十三・八度	摂氏四・三度
	平均零度以下の月	東北数県で一・二月に零度を割ることがある	一月、二月、三月、十一月、十二月
降水量	最多雨月	二六八ミリメートル	一六九ミリメートル
	全年	一八一七ミリメートル	七三八ミリメートル

（理科年表より算出）

ころが大きかったと言える。

日本の鉄器保存の実績上の限界が今のところBC三世紀頃だとしても、そのことによってそれ以前に鉄が無かったとの断定はできない。そして製鉄址の発掘調査に見るように、これに科学的年代測定法を適用することによって更に古い製鉄史が解明され得る筈である。

七　水稲文化と鉄器について

鉄が水稲耕作技術を飛躍的に向上させることは正しい。特に中国のように鋳鉄技術が先行したところでは、鋳造による農具の大量生産によって、農業が大きな変革を遂げたに違いない。然しながら、もともと水稲耕作は鉄とは無関係に存在し得る。弥生文化が水稲によって代表されるとしても、稲作の伝来以前に鉄があってもよい訳であるから、弥生時代以前に鉄が無かったとは言えない。

記紀の伝承によると、既に天照大神の頃水田耕作がなされていたことがうかがえる。また『シベリヤ史』に次のような記述がある。

「初期鉄器時代における沿海地方住民の生活を性格づける考古学資料は、BC一千年紀の終りからAD初めにかけて北鮮、満州及び沿海地方に居住していた挹婁族に関する文献資料に書かれている点と多くの点で一致している。……中略……彼らは《五穀》すなわち米、小麦、高粱、きび、大豆を知っていた。……」

勿論「五穀」云々の部以下は中国古文献からの引用であろうし、また古代の米粒が遺跡から伴出したわけではないから、沿海地方の稲作の年代が推定できないのは惜しいが参考のため付記した。聞くところによると、アジアの米には

南種と北種とがあって、日本の米は北種に属する。また両種の間には親和性（交配繁殖性）が無いとのことである。沿海地方の米が南北種いずれに属するかは知らないが、稲作文化の見地から彼の地と日本との関係を研究することも、将来に課せられてよい一課題であると思う。

以上のように、日本の古代鉄器文化の通説には幾多の疑問があることを指摘したい。

(3) 南沿海地方から蝦夷地への鉄器文化伝来の想定

たまたま一年ほど前にソ連科学アカデミー編『シベリヤ史』の中に「南沿海地方ではBC一千年頃すでに鉄が使われていた」という記述が目にとまったので、筆者はさらにその内容を確かめるため、BC一千年頃のものと推定される鉄斧を出土したという「ウラジオストク近傍ペスチャヌイ半島の古代居住地」の発掘報告（亜細亜大学アジア研究所紀要第二号の筆者翻訳「南沿海地方の古代鉄器文化」参照）等を読むうちに、筆者の抱いていた、沿海地方と日本との関係に対する関心が急に現実化して来た感を覚えた。ソ連考古学者の推定が正しいとすれば、日本の古代鉄器文化が沿海地方のそれに何らかの繋りを持つであろうと考えられるからである。

この項の本論にはいる前に、先ず日本海を横断して行なわれた、日本と沿海地方との交流の歴史を見てみよう。

一　歴史に現われた交流の事実と歴史以前における交流の想定

わが国と沿海地方との交流の歴史を語る最古の資料は、書紀の欽明天皇五年（五四四）に粛慎人（みしはせびと）が佐渡島に来たと

いう記録であるが、それ以前に境外の民の渡来は皆無であったかというと、筆者は当時の奥羽北陸の状況から判断して、「渡来の事実はあったとしても、その情報が大和朝廷まで伝わらなかった」と見る。ここで当時の蝦夷地の状況をふり返ってみよう。

蝦夷地の開拓はわが朝廷の長年に亘る頭痛の種であった。蝦夷征討の記録は日本武尊の東征（一一〇）に始まるが、それ以後数次の征討を経て、漸く奥羽の開発が順調に進んで来たのは嵯峨天皇の御治世（八〇九―八二三）と言われている。その間蝦夷の向背は常なく、時に恭順を示して皇化に浴したかと思うと突如背叛するということの繰返しで、それ以後においてもいわゆる「俘囚の乱」が十一世紀頃まで各地で起っている。今の新潟県に盤舟、渟足の柵が設けられたのが漸く大化改新（六四六）の直後であるから、それから一世紀も前の欽明天皇五年頃どの範囲が大和朝廷の皇化に浴していたかはおよそ想像がつく。筆者は、太平洋岸では、比較的早く開けた関東地方、日本海側ではせいぜい今の新潟市あたりまでで、それ以遠は全く蝦夷の勢力下にあっていわゆる賊地とされていたと思う。蝦夷地自体がまた統一された政権下にあったとは考えられないので、当時のわが北辺の対外情報の収集伝達は、蝦夷地内でも極めて不十分であったに違いない。

こう見てくると、欽明朝以前に境外の民がわが北辺に渡来したとしても、その情報を大和朝廷の記録に求めること自体が無理である。

粛慎人と称する境外の民が欽明朝以前に渡来し得る可能性を考えるための手がかりとして、『日本書紀』と『続日本紀』から彼の地の住民の渡航の足跡を探ってみよう（傍点、西紀年は筆者）。

① 書紀巻第十九、欽明天皇五年（五四四）

『十二月、越国言さく、佐渡島の北の御名部の碕岸に粛慎人有り、一つの船舶に乗りて淹留る。春夏に捕魚して食に充つ。彼の島の人言へらく、人に非ずと。亦鬼魅なりと言ひて、敢へて近かず。』

② 書紀巻第二十六、斉明天皇四年（六五八）

「是歳、越国守阿倍引田臣比羅夫、粛慎を討ちて、生羆二、羆皮七十枚を献る〔或本に云ふ、阿倍引田臣比羅夫粛慎と戦ひて帰り、虜四十九人を献る〕。」

③ 同右六年（六六〇）

「三月に、阿倍臣〔名を闕せり〕を遣して、船師二百艘を率て、粛慎国を伐たしむ。阿倍臣陸奥の蝦夷を以て己が船に乗らしめて大河の側に到る。是に、渡島の蝦夷一千余、海の畔に屯聚み、河に向ひて営す。営の中の二人進みて、急に叫びて曰はく、粛慎船師多に乗りて、将に我等を殺さむとする故に、願はくは河を済りて仕官らむと欲すと。阿倍臣船を遣して、両箇の蝦夷を喚至らしめて、賊の隠所と其の船数とを問ふ。両箇の蝦夷便ち隠所を指して、船二十余艘なりと曰す。即ち使を遣して喚すに、肯へて来ず。阿倍臣乃ち綵帛・兵・鉄等を海の畔に積みて、貪嗜ましむ。粛慎乃ち船師を陳ねて……中略……阿倍臣数船を遣して喚さしむるに、肯へて来ず。弊賂弁島〔弊賂弁は度島の別なり〕に復りぬ。」

その後、粛慎人を饗応したり位を授けたりしたということが斉明天皇六年、持統天皇八年（六九三）の記録にあるところを見ると、彼らの中には渡来後皇化に浴して大和民族に同化した者のいたであろうこともうかがえる。

書紀の「粛慎人」が直ちに中国文献の粛慎族に当るかどうかは別として、少なくとも日本列島以外の種族で、わが国先住の蝦夷とは別種であったであろうことは、書紀の記述がこの両者をはっきり書き分けている点から察して先ず

間違いあるまい。佐渡の住民が初めて見る粛慎人の風貌や習俗に驚いた様子が①からうかがえる。②の「羆」は津軽海峡以南には棲息しないから、ここの粛慎人は少なくとも北海道以遠の住民には違いないし、また③の船師二十余艘を陳ねて来たこと、わが大和朝廷が当時としては大海軍とも言える二百艘の艦隊を以てこれの征討に充てたことから考えると、恐らく、沿海地方のツングース族の一部の計画的侵寇ではなかったろうか。これがどの方面から渡島（北海道南部）に来たかは知る由も無いが、ウラジオストク—函館航路が七八〇キロ、少し北寄りのオルガ付近から北海道西端までは約四〇〇キロ、さらに北上すれば簡単に海を渡って樺太—北海道—津軽と南下できた筈である。

一方、この頃朝鮮半島北部から長白山脈一帯にかけて早くから国家的体制を整えていた高句麗（書紀の言う「高麗」）と日本との交流の経路を拾って見よう。高句麗との交流の記録は、神功皇后三韓征伐の際に彼が百済と共にわが国に投降した（『日本書紀』巻第九、AD二〇〇）のが初めてで、天智天皇七年（六六八）高句麗滅亡の後まで続く。この間の日本の外交の窓口は筑紫であったから、高句麗の使の多くが筑紫に来たという記録の多いのはもっともなことで、また書紀に特に渡来地の明記されていない場合も先ず筑紫と見てよいであろう。とくに新羅、百済の使者と同行した場合はそうだろう。ところが高句麗が単独で使者を「越」（北陸）に上陸させたことが、欽明天皇三十一年（五七〇）、敏達天皇二年（五七三）、同三年（五七四）と天智天皇七年（六六八、高句麗滅亡直前）の四回ある。思うに、日本側からすれば、高句麗、新羅、百済の三国は等しく朝鮮半島という一ブロック内の小国であって、交流の窓口を筑紫の一カ所に絞ることが便利であったろうが、三国相互の間には常に微妙な軋轢があって、時に、高句麗の使者が他の二国の使者と同行できないか、或いはこれらを経由することが好ましくないような場合には、筑紫への途を避けて、北朝鮮から直路わが北陸を目指したのではないであろうか。また、却ってその経路が便利だったのかも知れない。

その後、「高麗の旧地に復して」七一二年に建国した渤海国の領有する海岸線も高句麗のそれと大差なかった。わが国と渤海との交流は、聖武天皇神亀四年（七二七）渤海国使高仁義一行の蝦夷地への漂着を始め、約二百年に亘る間、殆んど北陸、奥羽を経由してなされている。一時わが朝廷が、北陸方面への渡来を禁止して筑紫に回航すべき旨を指示したにも拘らず、又もや北陸にやって来たので、朝廷はこれを詰問し、使節が陳謝するという経緯もあったが、その後はわが朝廷も黙認の形で北陸への渡来が続いたようである（以上『続日本紀』より）。

以上見て来たように、粛慎、高句麗、渤海から日本に来るには、遠く対島方面から筑紫に回るよりは、日本海を横断して直路北海道、奥羽、北陸の海岸に向かう方が、より安全で近路であったように思われる。

なお『シベリヤ史』の記述によると、

「ウラジオストク近くのペスチャヌイ半島の古代居住地で発見された魚骨の大部（89％）は日本さばのそれである。このことは、貝塚を伴なう居住地の住民が、海岸から洋上遠く出航して魚撈に従事したことを物語っている。恐らく彼らは、アリューシャンの皮舟タイプの特殊な洋上舟艇をもっていたに違いない。」（『シベリヤ史』一巻二六三頁、傍点は筆者）

日本さばの回遊は日本本土近海に限られている。かつ当時の日本海の海流が現在とあまり変りないとすれば、ウラジオストク付近の古代住民が遠く日本近海まで出漁し、その一部がたまたま裏日本に漂着したり、或いは積極的にわが北辺を窺ったりしたであろうことは、前述古典の記述とも併せ考えるとき、想像に難くない。

二　沿海地方と裏日本との鉄器文化の関係

『シベリヤ史』の言う如く、BC十世紀に南沿海地方で鉄が使われていたとすれば、海流と季節風に乗って裏日本に流れ着いた人達の手で製鉄技術がもたらされたであろうことも考えられる。難民を生じるような戦争や政治的変動が無い限り一挙に大量の移民は考えられないが、鉄器文化の伝播はごく少数の人々の渡来によっても、鉄鉱資源さえあれば極めて自然にまた急速に行なわれるものであって、戦争や政変を必要としない。幸い日本列島は原始製鉄に適した砂鉄が極めて豊富である。製鉄技術が一旦伝わると、砂鉄産地周辺には逸早く製鉄技術が開花し、長年に亘る製鉄産業地としての伝統の第一歩が生れる。裏日本の能登、加賀、越前、出雲あたりはその好い例であろう。

金沢経済大学学長吉岡金市氏（現在竜谷大学教授）は長年に亘り山陰北陸地方の古代製鉄址の調査研究にたずさわって来た人であるが、筆者は過日とくに乞うて同氏の「北陸古代製鉄史に関する調査研究」の報告（金沢経済大学経済開発研究所昭和四十七年度研究報告73—3）を提供していただいた。氏の調査された製鉄址のC^{14}法による年代測定成果は、窪田蔵郎氏『鉄の考古学』に一表としてまとめてあるので、それを借用したが、吉岡氏の報告によれば、

窪田蔵郎『鉄の考古学』より（吉岡金市氏発表）

試料採集場所	遺跡名	試料種別	C^{14}絶体年代（BP）
島根県熊野村	熊野タタラ	木炭	五一〇 ± 九〇
東忌部村	金屋守遺跡	〃	九八五 ± 八〇
西忌部村	荒神遺跡	薪炭	一六三〇 ± 九〇
加茂町	バンノキ製鉄跡	〃	一二六〇 ± 八〇
〃	バチガ原製鉄跡	〃	一二一〇 ± 八〇
福井県細呂木駅	製鉄跡I	〃	二四一〇 ± 九〇

〃	Ⅱ	〃	二二三〇	±	一〇〇
〃	Ⅲ	〃	一七九〇	±	一〇〇
細呂木駅裏	Ⅳ	〃	一七三〇	±	一〇〇
牛ノ谷	小学校裏	〃	一四〇〇	±	二一〇
石川県加賀市豊町	逢坂山製鉄跡	〃	一八四〇	±	八〇
〃	ヒョータン池製鉄跡Ⅰ	〃	二三五〇	±	一〇〇
〃	Ⅱ	木炭	八八〇	±	九〇
〃	峠道製鉄跡	薪炭	一三〇〇	±	九〇
小松市粟津	豊町ヨシノキ坂製鉄跡	〃	二一八〇	±	一一〇
能登志賀町	二ツ梨製鉄跡	〃	一六三〇	±	九〇
能登穴水町	火打谷製鉄跡	〃	一七四〇	±	一六〇
羽咋市	中居タタラ	木炭	九五〇	±	一〇〇
〃	瀧谷製鉄跡Ⅰ	〃	一四〇	±	一一〇
〃	2	〃	八八〇	±	二二〇
〃	3	炭粉	一八九〇	±	二四〇

記紀や風土記の伝承による製鉄法はフイゴを用いたタタラ製鉄であるが、北陸地方でわれわれが発見したものは、発掘調査の結果、フイゴを使うタタラ製鉄以前のものであることがあきらかになった……

とあり、表中、加賀市豊町ヒョウタン池製鉄跡Ⅰは、タタラ以前の自然風利用のものであるとのことである（前掲、吉岡氏報告）。

右の表の年代測定が正しいとすれば、絶対年代二四一〇±九〇（BC六―四世紀）、二三五〇±一〇〇（BC五―三世紀）、二二三〇±一〇〇（BC四―二世紀）という古い製鉄址を遺してくれた古代の鉄工は、蝦夷か蝦夷地に渡来して定住同

化した境外の民であることは、もはやこれまでの記述によって疑う余地はなくなる。また彼らが後世、俘囚臣川上部等の祖となったであろうことも想像される。従って筆者は、加賀、越前の古代製鉄技術の源を南沿海地方の鉄器文化に求めたい。

南沿海地方における古代製鉄址の資料は入手が困難であるが、次の『シベリヤ史』の一節から、靺鞨族の製鉄址の概略が把握できる。

「ソ連領極東では、靺鞨時代に属する考古学遺跡（居住地、墓、壁画）が非常に多い。この時代には鉄が最終的に石を駆逐し、絶対的に技術を支配した。靺鞨族の居住地は常に鉄鉱石熔解の跡を伴なう。因みにブラゴヴェシチェンスク地方（筆者註、アムール河上流左岸）のセルゲーエフカ村近くで、炭と焦げた焚物（筆者註、恐らく薪）に覆われた炉址が発見された。炉の底部に鉱滓があった。保存された炉底部は、焼け焦げた円形の底をもつ、直径六〇センチ、深さ一六センチの穴である。こわれた炉の上部は、或いは、丘を掘り下げて作るか、或いは何らかの耐火性材料を組立てるかして作った円筒室様のものである。室内には鉄鉱石が焚物と共に雑然と積まれている。熔けた鉄は下方に流れ落ち、底面が円形で上面がでこぼこした銑となって溜ったのである。」（『シベリヤ史』一巻三〇八頁）

これだけの記述でははっきりしないが、日ソ両国の専門家が立会いの上で製鉄址の実査をすることができたら、日本の製鉄址との比較ができて、興味ある結論が出るのではないかと思われる。

(4) 古代日本の鉄器文化の源流

もはやこれまでの論述によって、考えられる古代日本の鉄器文化の源流は、おのずから次の四つに限定されよう。

一、日本本土で偶然の機会に発見された熔鉄技術

二、大和民族が大陸から日本列島に渡ったと仮定した場合に、その際同時に帯同して来た本来の倭鍛冶の技術

三、南沿海地方から裏日本の蝦夷に伝来したもの

四、中国大陸から主として朝鮮半島を経て伝来したもの

これらを総合して、筆者は一つの想定を立てた。それは、

既に西日本もしくは大陸のどこかで鉄を知っていた大和民族が大和地方に来てみると、先住の蝦夷の間にも鉄が知られていた。蝦夷の同化に伴なって、大和民族が帯同して来た鍛冶の技術に蝦夷の鍛冶（俘囚臣）の技術が融合して後世の倭鍛冶の鍛造技術が結実して行った。そこへ中国の鋳造技術が伝来して、従来の少数生産の鍛造技術に大きな技術変革をもたらした、

というのである。

(5) 南沿海地方鉄器文化の源流

ソ連の考古学者オクラドニコフは、「極東における鉄の普及は、多分、今のところわれわれには未だ不明の或る中心から来たと推定しなければならないだろう」と言っているが、いずれは西方と中国としか考えられない。筆者は、北東アジアの鉄器文化の由来を先ず西方に求める。中国の影響を受けたのは後になってからで、日本と同様、鋳造技

術の面で中国に負うところがあったと見る。

漢民族が黄河流域に定住して農耕を営む遙か以前から、四方の蛮族の間では、鉄がすでに知られていたこと、さらに蛮地からの貢物の中には、鉄や銀のほかに「鏤」（鉄と区別した鋼（はがね）の意）なる品目があげられているから、漢民族以外の民族の間ではすでに鋼がつくられていたことが推察されること（『アジア歴史事典』六巻「製鉄の歴史」、市川弘勝）とも関連し、筆者は鉄器文化の伝播に関して次のように想定する。

一般的に文化の伝播の波が、一地域に定着した大きな文化圏（国家又は国家群でもよい）にぶつかると、それはその文化圏に吸収消化され濾過され、或いは更に発展した後に、ようやく圏外に伝播して行くが、それには長い年月を要する。すべての発見や発明がそうであるように、貴重な鉄の技術と資源を得た国はこれを独占して先ず生産用具や武器の生産に充てることによって自国の強化発展に貢献させようと努める。そうしてそれが圏外に流出するのは、もはや鉄が圏の内と外との力のバランスに大きな影響力を持たなくなるか、逆に戦争や政変でその文化圏が潰れてからのことである。これを中国の例にとれば、鉄を入手した漢民族は、先ず農器具、次いで武器の生産に充てるが、中国という大きな文化圏（国家群）の中でも、鉄をめぐっていろいろな歴史が展開される。そうして高度に開花した中国の鉄器文化が、東北、朝鮮を経て日本へ流れ出したのは、遙か後世のことであった。このように、一地に定着した文化圏は、文化の伝播をさえぎる障壁の役を演じるのである。

このような中国の文化圏とは全く対蹠的に、その北方ステップ地帯の騎馬遊牧民の間では、その生態が常に流動的であり、少数部族間の対立、抗争、混淆が繰返され、生活が一地域に定着し得ない環境にあった。このような環境の下では、文化もまた流動的でありその消長も急激であるとともに、伝播速度も急速であったと考えられる。筆者は、

この流動する西方から北東アジアへの文化経路を北方回廊と仮称する。

中国という一地域に長く定着した文化圏の中で高度の文化が醸成されている間に、ヒッタイト王国が二世紀に亘って独占していた西方の鉄器文化は、王国の滅亡（BC十二世紀）とともに四方に拡散し、その一部は遊牧民を媒介として北方回廊を経て急速に東方に伝播して行った。それには一地に定住しない騎馬遊牧民族の馬の物理的速度に負うところが多かったと思う。そうしてヒッタイトの鉄器文化は、むしろ中国よりも早く北東アジア諸族の間に及んだ。そして西方の製鉄技術は元来「鍛造」であった（ヨーロッパの鋳造技術は十四世紀に始まったと言われる）から、中国周辺の蛮族の間に早くから「鋼」が作られていたということもうなずけるのである。

ただ最後に一言したいのは、BC一千年頃と推定された、前記ペスチャヌイ半島出土の鉄斧が「鋳鉄」であるという事実をめぐって、更に解明しなければならない問題が生じて来るということである。鋳鉄技術は今のところ中国から来たとしか考えられないであろう。ところが中国の鉄の歴史は「まえがき」にも述べたとおりBC七―六世紀というのが通説であるから、両者の間に三―四世紀のひらがきが生じる。ソ連の考古学者はペスチャヌイ半島出土鉄器の調査報告の中に大きな紙面を割いて中国鉄器文化が従来の通説よりも遙かに古いことを力説し、「鉄は殷帝国が周の諸公によって征服されかけた頃、恐らくBC十一―十世紀に知られていた。そして周王朝による中国征覇にあたって決定的役割を果たした」というエルケスの説を支持しているが、今後に残された研究問題であると思う。

(6) むすび

日本の考古学研究の現状は、中国の古墳発掘に刺戟されてか、このところ古墳の発掘に大きな関心が注がれているかに感じられ、古墳時代以前の原始製鉄址の発掘調査はごく一部の人達に限られているようである。今後日本の古代鉄器文化を解明するには、製鉄址、とくに先ず古代蝦夷地（北海道、奥羽、北陸）のそれの発見と発掘調査に意を用うべきであろう。

中国は文革後、古墳の発掘で世界の耳目を惹いたが、未だ製鉄址、とくに東北辺境のそれの調査は殆ど未着手ではないであろうか。

北鮮の状況も明らかではないが、僅かにソ連の資料によって知る限りでは、トーユーホー博士以下が精力的に遺跡の発掘に取り組んでいるとのことであって、彼は、朝鮮の金属文化はBC一千年まで溯ると見ているようである（『アジア研究所紀要』第二号、筆者の翻訳資料）。

ソ連が南沿海地方の発掘に乗り出したのは概して戦後のようである。オクラドニコフの発表は一九六三年で、その後新しい資料は知らないが、ウラジオストク近くのペスチャヌイ半島出土の鉄斧がBC一千年頃のものだとの推定が正しいとすれば、特筆すべき新資料である。遺憾ながら、潤沢な資料の入手が困難なために、ペスチャヌイ半島以外の古代遺跡の調査の詳細な状況がつかめない。とくに、鉄器は出たが、それと同時代の製鉄址のことが明らかでないので、率直なところ前記の鉄斧が、その土地で作られたものか、或いは後世の中国からの輸入品がたまたま古代住居から伴出したものか、われわれの知り得る資料の範囲では判定がつきかねる。

古代ツングース文化の開花した地域が、たまたま現在のソ、中、北鮮の国境にまたがっているため、この地域の発掘調査は、国際的な協同研究の場を設けなければその進展は望めない。鉄の歴史は征服支配の歴史とも言われるが、

アジアの歴史的なまた民族学的な見地からも、この地域の鉄器文化の研究の価値は大きい。韓国、日本をも含めて前記諸国が、イデオロギーや誤った民族感情に妨げられることなく、純学術的立場に立って研究に取組むことが望ましい。

参考文献

『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『古語拾遺』
関野雄『中国考古学研究』昭和三十一年刊。
窪田蔵郎『鉄の考古学』昭和四十八年刊。
吉岡金市「北陸古代製鉄史に関する研究」(金沢経済大学経済開発研究所昭和四十七年度研究報告73—3)。
白柳秀湖『新版民族日本歴史』昭和十七年刊。
斎藤昌二『日本古代史攷』全三巻、昭和二十八年刊。
徳間書店『日本刀全集』昭和四十七年刊。
『アジア歴史事典』『理科年表』
ソ連邦科学アカデミー編『シベリヤ史』全五巻、一九六八年刊(露文)。
ア・ペ・オクラドニコフ『ウラジオストク近傍ペスチャヌイ半島の古代居住地』一九六三年刊(露文)。